

平成26年度 課程博士学位請求論文要旨

メンデルスゾーンの形而上学
—神の存在の「新しい学的な証明」—

立正大学大学院
文学研究科哲学専攻

藤井 良彦

1. 論文の問題設定

本論文では、モーゼス・メンデルスゾーンの哲学、それも神の存在証明について論じた。メンデルスゾーンは、美学者としてはよく知られている。しかし、哲学者としてのメンデルスゾーンはあまり知られていない。

哲学史において、メンデルスゾーンは一般に「ライプニッツ＝ヴォルフ派」の一員として分類されている。ここで「ライプニッツ＝ヴォルフ派」とは、ライプニッツの哲学を、当代のドイツを代表する哲学者であったヴォルフが矮小化したもの、と一般に規定されている。つまり、それはライプニッツ哲学を「通俗化」したものと理解されているのである。

確かに、メンデルスゾーンは「通俗哲学」者であった。しかし、これは、当時においては、ハレ大学やゲッティンゲン大学といった大学の哲学者たちに対して、ベルリン啓蒙という時代を生きた知識人たちの呼び名であった。つまり、「通俗」的であることは啓蒙主義の理念に適うことなのであって、それは大学における知識の「体系 (System)」をわかりやすい仕方で広く一般に広めることを目的としていたのである。

しかし、従来の哲学史においては、こうした事情に関する無理解から、メンデルスゾーンは「ライプニッツ＝ヴォルフ派」とされながらも、また「通俗哲学」者ともされるという矛盾した事態を招いてしまっている。そして、そのことがひいては彼の哲学の低評価へとつながっているのである。

そこで、本論は哲学者としてのメンデルスゾーンを研究することを目指すものであるが、そのためにも主として従来の哲学史におけるメンデルスゾーン像の修正を意図した。そもそも、誤った哲学史的な知識に基づいては、彼の哲学を正當に評価することはできないだろう。それどころか、哲学史における評価が低いために、彼の哲学は全くと言っていいほど研究されてこなかったのである。従って、彼の哲学を研究することは、また彼の哲学史における評価を問い直すことにならなくてはならないのである。

しかし、本論においては、このことからしてメンデルスゾーンを哲学史上に位置付け直すということまでは行っていない。本論としては、メンデルスゾーンの哲学を明らかとすることによって、少なくとも哲学史における彼の評価を、ひいてはドイツ哲学史を問い直すきっかけを与えることで満足したいのである。

2. 先行研究の概観

メンデルスゾーンの研究は、そもそもは彼がユダヤ啓蒙 (ハスカラ) の代表人物とされていることからして、やはりユダヤ人の研究者によるものが多かった。これは、彼がメンデルスゾーンというドイツ語名を最初に名乗ったユダヤ人であって、ユダヤ啓蒙主義の旗手と看做されることからして当然のことである。

しかし、時代が進むにつれて、メンデルスゾーンによる啓蒙主義はユダヤ人をドイツという民族国家に「同化」することであった、という批判がなされるようになる。こうした批判は、とりわけドイツにおけるシオニズムの高まりと軌を一にしたものであった。19世紀後

半の思想傾向としては、ユダヤ人の「解放」が求められたのであって、メンデルスゾーンのような啓蒙主義者たちの試みは「同化」として批判されることになったのである。

こうした中、メンデルスゾーンをいわば純粋に哲学的に研究したのがアルトマンであった。1973年に出されたその著作『モーゼス・メンデルスゾーン』は、メンデルスゾーンの生涯を事細かに描いて見せた記念碑的な労作である。しかし、彼による研究もやはりメンデルスゾーンを一人のユダヤ人として見るものであった。これは、彼自身がユダヤ人であったことからして仕方のないことなのかもしれない。

本論としては、アルトマンの研究の不備を補いつつ、一人の哲学者としてのメンデルスゾーンを研究することを目指した。

3. 概要と結論

メンデルスゾーンの晩年の著作である『朝の時間』には、彼自身によって「新しい証明」とされる神の存在証明がある。本論としては、この証明を検討することで、哲学史における従来の評価、つまり「ライプニッツ＝ヴォルフ派」であるとか「通俗哲学」者といった評価では捉えることのできないメンデルスゾーン哲学の実相を示すことを目指した。

本論の最初に検討しているのは、彼の「懸賞論文」である。この論文は有名なものであるが、アルトマンの研究を除いては、この論文を詳細に検討した研究はない。この論文には神の存在証明があるが、内容としてはやはり「ライプニッツ＝ヴォルフ派」とでも形容されるような哲学観に基づいたものであり、あまり評価されるものではない。「懸賞論文」執筆の段階において、メンデルスゾーンは神の存在証明という試みに関して、あまり疑問を抱いてはいなかったようである。

これが疑問視されたきっかけとしては、まずはカントの『証明根拠』の影響があった。

メンデルスゾーンはこの著作に関する書評を書いていたのであった。しかし、これまでにこれが検討されたことはなかった。この書評を読めば、この著作が神の存在証明に関するメンデルスゾーンの見解を変えるきっかけとなったことが理解されるだろう。

同様に、カントの教え子でヘルツというユダヤ人もまたメンデルスゾーンに大きな影響を与えていた。ヘルツは、しばしばメンデルスゾーンの家を訪ねては、カントの立場を代弁して彼と哲学議論をしていたのである。その結果として書かれたのが、「ア・プリオリに論証された神の現存在」というメンデルスゾーンの小論である。

この小論は、わりと最近になってアルトマンによって発掘されたものである。従って、これに関する研究はアルトマンによるものを除いては一つもない。しかし、この小論は「懸賞論文」における証明とはまったく異なった証明を提示しているものであるために重要である。しかも、ここにはカントやヘルツの影響が明らかに見られるのである。

さて、この小論には概念の主観的な思考可能性ということが言われている。これは、必ずしも概念の無矛盾性からするその思考可能性を意味するのではない。もっとも、この小論は書簡に付されたものであることからしても不完全なものであり、こうした概念の主観的な

思考可能性ということに関して詳しく書かれているわけではない。とはいえ、これが重要な概念となって、晩年の『朝の時間』における「新しい証明」は構想されたのである。

そこで、『朝の時間』であるが、同書の核心が「新しい証明」が展開されている第十六講であることは間違いない。しかし、それはこれまでの経緯を踏まえてこそ理解されるものである。それも、もちろん第一講からの議論を踏まえなければ、この第十六講を理解することはできない。

まず、第七講までの議論は、メンデルスゾーンの「像論」とでも言うべき立場の説明となっている。メンデルスゾーンは、表象-対象という対概念を避けて模像-原像という対概念を用いる。この像論においては、心に現れているのは像であって、それが像として看做されている限りにおいて、それは「現象」なのだけれども、それが何らかの「対象」を写し出したものであるとなると、そこには判断が誤る余地も生じる、と言われる。

では、なぜこうした像論とでも言える体系が打ち出されたのかと言えば、それは一つにはランベルトの「現象学」との対決からであった。メンデルスゾーンは、ランベルトの著作『新オルガノン』の書評において、その仮象論とでも言うべき「現象学」を批判している。

もう一つ、メンデルスゾーンの像論にはその成立要因となる対抗論があった。それは、レッシングによる像論である。レッシングによると、神のうちには万物の原像があるのだから模像など必要ない、ということである。メンデルスゾーンはこれに反対して、仮に神が万物を像として写し出しており、しかもその原像がまた神のうちにあるとしても、人間の「自己意識」だけは決して神によっては写し出されない、と言うのである。そこで、メンデルスゾーンはこの「自己意識」を「私の原像的な現存在」と言う。

この点に関しては、またスピノザとの対決があった。スピノザに関する批判的な言及は、既に初期の『哲学対話』という著作や、プラーテンとの書簡などにおいても見られる。メンデルスゾーンによれば、スピノザの誤りは、万物を神の様態としてしまうことによって、自分という「私」さえもその様態としてしまうことにある。こうした批判が、『朝の時間』におけるレッシングの純化されたスピノザ主義なるものとの対決においてさらに磨かれ、メンデルスゾーンに固有の「像論」とでも言うべき体系はより一段と強固なものとなる。

さて、まずは、こうした体系があるゆえに、『朝の時間』はそれ以前の著作とは内容の上からして異なっているのである。それも、ひいてはこのゆえに『朝の時間』におけるメンデルスゾーンの立場は、「ライブニッツ=ヴォルフ派」という「独断的形而上学」にはならないのである。そして、当然ながら『朝の時間』における「新しい証明」とは、こうしたメンデルスゾーンに固有の体系に基づいてなされているものである。このことからして、フォアレンダー、ベック、ヘンリッヒ、バイザーといった有名な哲学史家たちによるメンデルスゾーンに関する従来の評価は修正を迫られることになる。